

# 蛩

## 渋谷栄一訳

### 第一章 玉鬘の物語 蛩の光によって姿を見られる

「第一段 玉鬘、養父の恋に悩む」

今はこのように重々しい身分ゆえに、何事にももの静かに落ち着いていらつしやるご様子なので、ご信頼申し上げていらつしやる方々は、それぞれ身分に応じて、皆思いどおりに落ち着いて、不安もなく、理想的にお過ごしになっている。

対の姫君だけは、気の毒に、思いもしなかった悩みが加わって、どうしようかしらと困っていらつしやるようである。あの監が嫌だった様子とは比べものにならないが、このようなことで、夢にも回りの人々がお気づき申すはずのないことなので、自分の胸一つをお痛めになりながら、「変なことで嫌らしい」とお思い申し上げなされる。

どのようなことでもご分別のついでにお年頃なので、あれやこれやお考え合わせになつては、母君がお亡くなりになつた無念さを、改めて惜しく悲しく思い出される。

大臣も、お口にいつたんお出しになつてからは、かえって苦しくお思いになるが、人目を遠慮なさつては、ちょっとした言葉もお話しかけになれず、苦しくお思いになるので、頻繁にお越しになつては、お側に女房などもない、のんびりとした時には、穏やかならぬ言い寄りをなさるたびごとに、胸を痛め痛めしては、はつきりとお拒み申し上げることができないので、ただ素知らぬふりをしてお相手申し上げていらつしやる。

人柄が明朗で、人なつこくいらつしやるので、とてもまじめぶつて、用

心していらつしやるが、やはりかわいらしく魅力的な感じばかりが目立つていらつしやる。

「第二段 兵部卿宮、六条院に来訪」

兵部卿宮などは、真剣になつてお申し込みなされる。お骨折りの日数はそれほどたつてないのに、五月雨になつてしまつた苦情を訴えなさつて、

「もつ少しお側近くに上がるごことだけでもお許し下さるならば、思つてのこと、少しは晴らしたいものですね」

と、申し上げになされるのを、殿が御覧になつて、

「何のかまつことがあるうか。この公達が言い寄られるのは、きつと風情があるう。そつけないお扱いをなさるな。お返事は、時々差し上げなさい」とおつしやつて、教えてお書かせ申し上げなされるが、ますます不愉快なことに思われなされるので、「気分が悪い」と言つて、お書きにならない。

女房たちも、特に家柄がよく声望の高い者などもほとんどいない。ただ一人、母君の叔父君であつた、宰相程度の人の娘で、嗜みなどさほど悪くはなく、世に落ちぶれていたのを、探し出されたのが、宰相の君と言つて、筆跡などもまあまかに書いて、だいたいがしつかりした人なので、しかるべき折々のお返事などをお書かせになつていたのを、召し出して、文言などをあつしやつて、お書かせになる。

お口説きになる様子を御覧になりたいのであろう。

ご本人は、こうした心配事が起こつてから後は、この宮などには、しみじみと情のこもつたお手紙を差し上げなされる時は、少し心をとめて御覧になる時もあるのだつた。特に関心があるといつのではないが、「このようにつらい殿のお振る舞いを見ないですむ方法がないものか」と、さすがに女らしい風情がまじる思いにもなるのだつた。

殿は、勝手に心ときめかしなつて、宮をお待ち申し上げていらつしやるのもご存知なくて、まあまあのお返事があるのを珍しく思つて、たいそつこつそりといらつしやつた。

妻戸の間にお敷物を差し上げて、御几帳だけを間に隔てとした近い場所である。

とてもたいそう気を配つて、空薫物を奥ゆかしく匂わして、世話をやいていらつしやる様子、親心ではなくて、手に負えないおせっかい者の、それでも親身なお扱いとお見えになる。宰相の君なども、お返事をお取り次ぎ申し上げることなども分ならず、恥ずかしがつっているのを、「引つ込み思案だ」と、おつねりになるので、まこと困りきっている。

「第三段 玉鬘、夕間時に母屋の端に出る」

夕間のころが過ぎて、はつきりしない空模様も曇りがちで、物思わしげな宮の様子も、とても優美である。内側からほのかに吹いてくる追い風も、さらに優れた殿のお香の匂いが添わっているので、とても深く薫り満ちて、予想なさっていた以上に素晴らしいご様子に、お心を惹かれなさるのだった。

お口に出して、思っている心の中をおっしゃり続けるお言葉は、落ち着いていて、一途な好き心からではなく、とても態度が格別である。大臣は、とても素晴らしいと、ほのかに聞いていらつしやる。

姫君は、東面の部屋に引つ込んでお寝みになっていらしたのを、宰相の君が宮のお言葉を伝えに、いざり入って行く後についていて、「

とてもあまりに憂苦ししい」応対ぶりです。何事も、その場に依じて振る舞うのがよろしいのです。むやみに子供っぽくなさつてよいお年頃でもありません。この宮たちまでを、よそよそしい取り次ぎでお話し申し上げなさつてはいけません。お返事をしづりなさるとも、せめてももう少しお近くで「などと、ご忠告申し上げなさるが、とても困つて、注意するのにかこつけて中に入っておいでになりかねないお方なので、どちらにしても身の置き所もないので、そつとにじり出て、母屋との境にある御几帳の側に横になつていらつしやうした。

「第四段 源氏、宮に螢を放つて玉鬘の姿を見せる」

何やかやと長口舌にお返事を申し上げなさることもなく、ためらつてい

らつしやるところに、お近づきになつて、御几帳の帷子を一枚お上げにのりに併せて、ぱつと光るものが。紙燭を差し出したのかと驚いた。螢を薄い物に、この夕方たいそうたくさん包んでおいて、光を隠していらつしやうしたのを、何気なく、何かと身辺のお世話をしようにして。急にこのように明るく光つたので、驚きあきれて、扇をかざした横顔、とても美しい様子である。

「驚くほどの光がさしたら、宮もきつとお覗きになるだろう。自分の娘だとお考えになるだけのことだ、こうまで熱心にご求婚なさるようだ。人柄や器量など、ほんとうにこんなにまで整っているとは、さぞお思いでなかつう。夢中になつてしまつてに違いないお心を、悩ましてやろつ」

と、企んであれこれなさるのだった。ほんとうの自分の娘ならば、このようなことをして、大騒ぎをなさるまいに、困つたお心であるよ。別の戸口から、そつと抜け出て、行つておしまひになった。

「第五段 兵部卿宮、玉鬘にますます執心す」

宮は、姫のいらつしやる所を、あの辺だと推量なさるが、割に近い感じがするので、つい胸がどきどきなさつて、なんとも言えないほど素晴らしい羅の帷子の隙間からお覗きになると、柱一間ほど隔てた見通しの所に、このように思いがけない光がちらつくの、美しいと御覧になる。

間もなく見えないように取り隠した。けれどもほのかな光は、風流な恋のきつかけにもなりそうに見える。かすかであるが、すらりとした身を横にしていらつしやる姿が美しかったのを、心残りにお思いになつて、なるほど、この趣向はお心に深くとまつたのであつた。

「鳴く声も聞かえない螢の火でさえ、人が消そうとして消えるものでしょうか、ご存知いただけたでしょうか」

と申し上げなさる。このような場合のお返事を、思案し過ぎるのも素直でないで、早いだけを取柄に。

「声には出さずひたすら身を焦がしている螢の方が、口に出すよりもっと深い思いでいるでしょう」

などと、さりげなくお答え申して、「ご自身はお入りになつてしまったので、

とても疎々しくおあしらいなさるつらさを、ひどくお恨み申し上げなさる。好色がましいようなので、そのまま夜をお明かしにならず、軒の雫も苦しいので、濡れながらまだ暗いつちにお出になった。ほととぎすなどもきつと鳴いたことである。わすらわしいので耳も留めなかった。

「ご様子などの優美さは、とてもよく大臣の君にお似申していらつしやる」と、女房たちもお褒め申し上げるのであった。昨夜、すっかり母親のようにお世話やきなさつたご様子を、内情は知らないで、しみじみとありがたい」と女房一同は言う。

「第六段 源氏、玉鬘への恋慕の情を自制す」

姫君は、このようなうわべは親のようにつくろつご様子を、自分自身の不運なのだ。親などに娘と知っていたとき、人並みに大切にされた状態で、このようなご寵愛をいただくのなら、どうしてひどく不似合ということがあるつか。普通ではない境遇は、しまいには世の語り草となるのではないかしら」

と、寝ても起きてもお悩みになる。一方では、ほんとに世間にありふれたような悪い扱いにしてしまつまい」と、大臣はお思いになるのだった。が、やはり、そのような困つたご性癖があるので、中宮などにも、とてもきれいにお思い申し上げていられようか、何かにつけては、穏やかならぬ申しようで気を引いてみたりなどなさるが、高貴なご身分で、及びもつかない事面倒なので、身を入れてお口説き申すことはなさらないが、この姫君はお人柄も、親しみやすく現代的なので、つい気持ちを抑えがたくて、時々人が拝見したらきつと疑いを持たれるにちがいないお振る舞いなどは、あることはあるが、他人が真似のできないくらいよく思い返し思い返しては、危なっかしい仲なのであった。

## 第二章 光る源氏の物語 夏の町の物語

「第一段 五月五日端午の節句、源氏、玉鬘を訪問」

五日には、馬場殿にお出ましになった機会に、お越しになった。

「どうでしたか。宮は夜更けまでいらつしやいましたか。あまりお近づけ申さないように。やかいなお癖がおありの方ですよ。女の心を傷つかけたり、何かの間違いをしないような男は、めつたにいないのですよ」

などと、誉めたりけなしたりしながら注意していらつしやるご様子は、どこまでも若々しく美しくお見えになる。光沢も色彩もこぼれるほどの御衣に、お直衣が無造作に重ね着されている色合いも、どこに普通と違う美しさがあるのであるつか、この世の人が染め出したものとも見えず、普通の直衣の色模様も、今日は特に珍しく見事に見え、素晴らしく思われる薫りなども、物思いがなければ、どんなに素晴らしく思われるにちがいないお姿だろう」と姫君はお思いになる。

宮からお手紙がある。白い薄様で、ご筆跡はとても優雅にお書きになつていらつしやる。見ていた時には素晴らしかったが、こう口にするると、たいたことは無いものだ。

「今日までも引く人もない水の中に隠れて生えている菖蒲の根のように相手にされないわたしはただ声を上げて泣くだけなのでしょつか」

話題にもなりそうな長い菖蒲の根に文を結んでいらつしやつたので、今日のお返事を「などとお勧めしておいて、お出になった。誰彼も、やはり、ご返事を」と申し上げるので、ご自身どう思われたであろうつか、

「きれいに見せていただきましてますます浅く見えました わけもなく泣かれるとおっしゃるあなたのお気持ちは お年に似合わないこと」

とだけ、薄墨で書いてあるようである。「筆跡がもう少し立派だったら」と、宮は風流好みのお心から、少しもの足りないことと御覧になったことであろうよ。

薬玉などを、実に趣向を凝らして、あちこちから多くあった。おつらい思いをして来た長年の苦勞もすっかりなくなつたお暮らしぶりで、お気持ちにゆとりのおできになることも多かつたので、同じことなら、あちらが傷つくようなことのないようにして終わりにしたいものだ」と、どうしてお思いにならないことがあるつか。

殿は、東の御方にもお立ち寄りになって、中将が、今日の左近衛府の競射の折に、男たちを引き連れて来るようなことを言っていたが、そのおつもりでいて下さい。まだ明るいうちにきつと来るでしょうよ。不思議と、こちらでは目立たないようにする内輪の催しも、この親王たちが聞きつけて、見物にいらっしやるので、自然と大げさになりますから、お心づもりなさい」などと申し上げなされる。

馬場の御殿は、こちらの渡廊から見渡す距離もさほど遠くない。

「若い女房たち、渡殿の戸を開けて見物をしなさいよ。左近衛府に、たいそう素晴らしい官人が多い時だ。なまじっかの殿上人には負けまい」とおっしゃるので、見物することをとても興味深く思っていた。

対の御方からも、童女など、見物にやって来て、渡廊の戸口に御簾を青々と懸け渡して、当世風の裾濃の御几帳をいくつも立て並べ、童女や下仕などがあちこちしている。菖蒲襲の袖、一藍の羅の汗衫を着ている童女は、西の対の対であるう。

感じのいい物馴れた者ばかり四人、下仕え人は、棟の裾濃の裳、撫子の若葉色をした唐衣で、いずれも端午の日の装いである。

こちらの童女は、濃い単衣襲に、撫子襲の汗衫などをおっとりとして着て、それぞれが競い合っている振り舞い、見ていておもしろい。

若い殿上人などは、目をつけては流し目を送る。未の刻に、馬場殿にお出になると、なるほど親王たちがお集まりになっていた。競技も公式のそれとは趣が異なつて、中将少将たちが連れ立って参加して、風変りに派手な趣向を凝らして、一日中お遊びになる。

女性には、何も分からないことであるが、舎人連中までが優美な装束を着飾つて、懸命に競技をしている姿などを見るのはおもしろいことであった。

南の町まで通して、ずっと続いているので、あちらでもこのような若い女房たちは見ていた。「打毬楽」「落蹲」などを奏でて、勝ち負けに大騒ぎをするのも、夜になってしまつて、何も見えなくなつてしまつた。舎人連中が禄を、位階に応じて頂戴する。たいそう夜が更けてから、人々は皆お帰りになつた。

大臣は、こちらでお寝みになつた。お話などを申し上げなされて、兵部卿宮が、誰よりも格別に優れていらっしやいますね。容貌などはそれほどでもないが、心配りや態度などが優雅で、魅力的なお方です。こつそりと御覧になりましたか。立派だと言つが、まだ物足りないところがあるね」とおっしゃる。

「弟君ではいらっしやいますが、大人びてお見えになりました。ここ何年か、このように機会あることにおいでになつては、お親しみ申し上げなされていらっしやるとうかがつておりますが、昔の宮中あたりでちらつと拝見してから後、よくわかりません。たいそう立派に、ご容貌など成長なさいました。帥の親王が素晴らしくいらっしやるようですが、感じが劣つて、王族程度でいらっしやいました」

とおっしゃるので、「一目でお見抜きだ」とお思いになるが、にっこりして、その他の人々については、良いとも悪いとも批評なさない。

人のことに欠点を見つて、非難するような人を、困つた者だと思つていらっしやるので、

「右大将などをさえ、立派な人だと言っているようだが、何のたいしたことがあるうか。婿として見たら、きつと物足りないことであるう」と、お思いだが、口に出してはおっしゃらない。

今はただ一通りのご夫婦仲で、お寝床なども別々にお寝みになる。「どうしてこのよう疎々しい仲になつてしまつたのだらう」と、殿は苦痛にお思ひになる。だいたい、何のかのと嫉妬申し上げなさらず、長年このような折節につけた遊び事を、人づてにお聞きになつていらっしやつたのだが、今日は珍しくこちらであつたことだけで、自分の町の晴れがましい名譽とお思いでいらっしやつた。

「馬も食べない草として有名な水際の菖蒲のようなわたしを 今日節句なので、引き立てて下さつたのでしようか」

とおつとりと申し上げなされる。たいしたことではないが、しみじみとお感じになつた。

「鳩鳥のようにつも一緒にいる若駒のわたしは いつ菖蒲のあなたに別れたりしまじょうか」

遠慮のないお二人の歌であること。

「いつも離れているようですが、こうしてお目にかかりますのは、心が休まります」

と、冗談を言うが、のんびりとしていらっしやるお人柄なので、しんみりとした口ぶりで申し上げなされる。

御帳台はお譲り申し上げなさつて、御几帳を隔ててお寝みになる。共寝をするというようなことを、たいそう似つかわしくないことと、すっかりお諦め申していらっしやるので、無理にお誘い申し上げなされない。

### 第三章 光る源氏の物語 光る源氏の物語論

「第一段 玉鬘ら六条院の女性たち、物語に熱中」

長雨が例年よりもひどく降って、晴れる間もなく所在ないので、御方々は、絵や物語などを遊び事にして、毎日お暮らしになっていらっしやる。明石の御方は、そのようなことも優雅な趣向を凝らして仕立てなさつて、姫君の御方に差し上げなされる。

西の対では、まして珍しく思われなされることの遊び事なので、毎日写したり読んだりしていらっしやる。そのうってつけの若い女房たちが大勢いる。いろいろと珍しい人の身の上などを、本当のことが嘘のことかと、たくさんある物語の中でも、自分の身の上と同じようなのはなかった」と御覧になる。

『住吉物語』の姫君が、物語中での評判もさることながら、現実での評判もやはり格別のようだが、主計頭が、もう少して奪うところであったことなどを、あの監の恐しさと思えば御覧になる。

殿も、あちらこちらでこのような絵物語が散らかっていて、お目につくので、

「ああ、困ったものだ。女性というものは、面倒がりもせず、人にだまされ

ようとして生まれついたものですね。たくさんの中にも真実は少ないだろうに、そうとは知りながら、このようになつたら話にうつつをぬかし、だまされなさつて、蒸し暑い五月雨の、髪が乱れるのも気にしないで、お写しになることよ」

と言って、お笑いになる一方で、また、

「このような古物語でなくては、なるほど、どうして気の紛らしようのない退屈さを慰めることができようか。それにしても、この虚構の物語の中になるほどそうもあるつかと人情を見せ、もつともらしく書き綴つたのは、それはそれで、たわいもないこととは知りながらも、無性に興をそそられてかわいらしい姫君が物思いに沈んでいるのを見ると、何程か心引かれるものです。

また、けつしてありそうにないことだと思いつつも、大げさに誇張して書いてあるところに目を見張る思いがして、落ち着いて再び聞く時には、憎らしく思うが、とっさには面白いところなどがきつとあるのでしよう。

最近、幼い姫が女房などに時々読ませているのを立ち聞きすると、何と口のうまい者がいるものですね。根も葉もない嘘をつき馴れた者の口から言い出すのだからと思われませんが、そうではないありませんか」

とおっしゃると、

「おっしゃるとおり、嘘をつくことに馴れた人は、いろいろとそのように想像なされるでしょう。ただどうしても真実のことと思われるのです」

と言って、硯を押しやりなされるので、

「失礼にもけなしてしまいましたね。神代から世の中にあることを、書き記したものだそうだ。『日本紀』などは、ほんの一面にしか過ぎません。物語にこそ道理にかなつた詳細な事柄は書いてあるのでしよう」

と言って、お笑いになる。

「第二段 源氏、玉鬘に物語について論じる」

「誰その話と聞いて、事実どおりに物語することはありません。善いことも悪いことも、この世に生きていく人のことで、見飽きず、聞き流せないことを、後世に語り伝えたい事柄を、心の中に籠めておくことができず、語

り伝え初めたものです。善いように言おうとするあまりには、善いことばかりを選び出して、読者におもねろうとしては、また悪いことでありそうにもないことを書き連ねているのは、皆それぞれのことで、この世の他のことではないのですよ。

異朝の作品は、記述のしかたが変わっているが、同じ日本の国のことなので、昔と今との相違がありましようし、深いものと浅いものとの違いがありましようが、一途に作り話だと言い切ってしまうのも、実情にそぐわないことです。

仏教で、まことに立派なお心で説きおかれた御法文も、方便ということがあつて、分らない者は、あちこちで矛盾するという疑問を持つに違いありません。『方等經』の中に多いが、詮じつめていくと、同一の主旨に落ち着いて、菩提と煩惱との相違とは、物語の、善人と悪人との相違程度に過ぎません。

よく解釈すれば、全て何事も無駄でないことはなくなつてしまふものですね。

と、物語を實にことさらに大したもののおつしやうた。

「ところで、このような昔物語の中に、わたしのよな律儀な愚か者の物語はありませんか。ひどく親しみにくい物語の姫君も、あなたのお心のよな冷淡で、そらとぼけている人はまたとありますまいな。さあ、二人の仲を世にも珍しい物語にして、世間に語り伝えさせましよう」

と、近づいて申し上げなされるので、顔を引き入れて、

「そつでなくても、このように珍しいことは、世間の噂になつてしまひそんなことではございます」

とおつしやるので、

「珍しくお思いですか。なるほど、またとない気持ちがあります」

と言つて、寄り添つていらつしやる態度は、たいそつぶざけている。

「思いあまつて昔の本を捜してみました。親に背いた子供の例はありませんでしたよ。親不孝なのは、仏の道でも厳しく戒めています」

とおつしやるが、顔もお上げにならないので、お髪を撫でながら、ひどくお恨みなされるので、やつとのことです。

「昔の本を捜して読んでみました。おつしやるのとおりありませんでした。

この世にこのような親心の人は」

とお申し上げなされるにつけても、氣恥ずかしいので、そつひどくもお戯れにならない。

こつして、どうなつて行くお二方の仲なのであろう。

「第三段 源氏、紫の上に物語について述べる」

紫の上も、姫君のご注文にかこつけて、物語は捨てがたく思つていらつしやうた。くまのの物語の絵の箇所を、

「とてもよく描いた絵だわ」

と御覧になる。小さい女君が、あどけなく昼寝をしていらつしやる所を、昔の様子をご回想なさつて、女君は御覧になる。

「このよつな子供どつしでさえ、なんとませたことなのでしょう。わたしなど、やはり語り草になるほど、氣の長さは誰にも負けませんね」

と申し上げなされる。なるほど、世間に例の多くない恋愛を、数々なさつてこられたことよ。

「姫君の御前で、この色恋沙汰の物語など、読み聞かせなさいませぬ。秘め事をする物語の娘などは、おもしろいと思わぬまでも、このよつなことが世間にはあるものだと、当たり前のように思われるのが、困つたことなのです」

とおつしやるにつけても、格段に違つと、対の御方がお聞きになつたら、きつとひがまれよう。

紫の上は、

「軽率な物語の人の物真似の類は、見ていてもたまりませぬ。宇津保物語の藤原の君の娘は、とても思慮深くしつかりした人で、間違ひはないようですが、そつけない返事もそぶりも、女性らしいところがないようなのが、同じようですね」

と、おつしやるど、

「實際の人も、そついうものによつてです。一人前にそれぞれ主義主張を異にして、加減というものを知りませぬ。悪くはない親が、氣をつかつて育てた娘が、無邪気だけがただ一つのとりえで、劣つたところが多いのは、いつ

たいどんなふうにして育ててきたのかと、親の育て方までが想像されるのは、気の毒です。

なるほど、そうは言っても、身分にふさわしい感じがすると思えるのは、育てがいもあり、名譽なことです。口をきわめて気恥ずかしいほど誉めていたのに、しでかしたことや、口に出した言葉の中に、なるほどと見えたり聞こえたりすることがないのは、まことに見劣りがするものです。

だいたい、つまらない人には、どうか娘を誉めさせたくないものです」などと、ひたすら、この姫君が非難されないように」と、あれやこれやといろいろ考えておっしゃる。

継母の意地悪な昔物語も多いが、最近はず、心が見透かされ底意地悪い」と思われなされるので、厳しく選んでは選んでは、清書させたり、絵などにもお描かせなされるのだった。

「第四段 源氏、子息夕霧を思う」

中将の君を、こちらにはお近づけ申さないようにしていらっしやうたが、姫君の御方には、そんなにも遠ざけ申しなさらず、親しくさせていらっしやうる。

「自分が生きている間は、どちらにせよ同じことだが、死んだ後を想像すると、やはり平生から、馴染んでおいた方が、格別親しく思内側われるに違いない」

と考えて、南面の御簾の内側に入ることはお許しになっていた。台盤所、女房の中はお許しにならない。何人もいらっしやらないお子たちの間柄なので、とても大切にお世話申し上げていらっしやうた。

だいたいの性格なども、たいそう慎重で、真面目でいらっしやる君なので、安心してお任せになっていらっしやうた。まだ幼いお人形遊びなどの様子が見えるので、あの人と、一緒に遊んで過ごした昔の月日が、真先に思ひ出されるので、人形の殿の宮仕を、とても熱心になさりながら、時々は涙ぐんでいらっしやるのであつた。

そうしてもよさそうあたりには、軽い気持ちで言い寄ったりなさる女は大勢いるが、望みを懸けてくるようには仕向けない。愛人にしてもよさ

「あのだと、思い寄られそうな女も、無理に一時の浮気沙汰にして、やはりそつだと、思い寄られなくなったのを、無理に一時の浮気沙汰にして、やはりあの、緑の袖よと馬鹿にされたのを見返してやりたいものだ」と思う気持ちだけが、重大事として忘れられないのであつた。

無理にでも何とかつきまとつたならば、根負けしてお許しになるかも知れないが、つらいと思つた折々のことを、何とか内大臣にもお分りになっていただこう」と考えていたこと、忘れられないので、ご本人に対してだけは、並々ならぬ愛情の限りを表して、表面では恋い焦がれているようには見せない。

「ご兄弟の公達なども、小憎らしいなどとばかり思う事が多かつた。対の姫君のご様子を、右中将は、たいそう深く思いつめて、言い寄る手引きもたいそう頼りなかつたので、この中将の君に泣きついて来たが、

「他人事となると、感心できないことですね」と素つ気なく答えていらっしやるのだった。その昔の父大臣たちの御仲に似ていた。

「第五段 内大臣、娘たちを思う」

内大臣は、お子様方が夫人たちに大勢いたが、その母方の血筋の良さや、子供の性質に応じて、思いどおりのような世間の声望や、御権勢に任せて、皆一人前に引き立てなされる。女の子はたくさんはいないが、女御も、あのようにご期待していたこともうまくゆかず、姫君も、またあのように思惑と違つようなことであつたので、とても残念だと思ひになる。

あの撫子のことがお忘れになれず、何かのついでにもお口になさつたことなので、どうなつたのだろう。頼りない親の心のままに、かわいらしかつた子を、行く方不明にしてしまつたことよ。だいたい女の子というものは、どんなことがあつても目を放してはならないものであつた。勝手に自分の子供と名乗つて、はじめな境遇でさまよつているのだろうか。どのような恰好でいるにせよ、噂が聞こえて来たならば、

「と、しみじみとずつと思ひ続けていらっしやる。ご子息たちにも、

もし、そのように名乗り出る人があつたら、聞き逃すな。気紛れから、感心できない女性関係も多かつた中で、あの方は、とても並々の愛人程度と

は思われなかった人で、ちょっとした愛想づかしをして、このように少なかった娘一人を、行方不明にしてしまったことの残念なことよ」

と、いつもお口に出される。ひところなどは、そんなにでもなく、ついお忘れになっていたが、他人が、さまざまに娘を大切になさっている例が多いので、ご自分のお思いどおりにならないのが、とても情けなく、残念にお思いになるのであった。

夢を御覧になって、たいそうよく占う者を召して、夢の意味をお解かせになったところ、

「もしや、長年あなた様に知られずにいらっしやるお子様を、他人の子として、お耳にあそばすことはございませんか」

と申し上げたので、

「女の子が他人の養女となることは、めったにないことだ。どのようなことだろうか」

などと、このころになって、お考えになったりおっしゃっているようである。